か、決して証明できぬものがある。すべてわかっているはずなのに、自分に言いきかせることができない。逃げているのだろうか。なぜだ？　ちがう。もう考えるのはやめよう。それを考えてみても、どうにもならない。何かの役に立つということもない。しかし……。頭の右半分が疼く。耳鳴りがつづいている。

真夜中も過ぎた。もう月曜日だ。1日の仕事のために、6時間は睡眠をとっておきたい。エネルギーを溜めるための眠りだ。昨日の出来事は、もう終ってしまったことだから、闇の底に沈めてしまいたい。微熱のように記憶が火照って、漂流している。心臓を下にして、鼓動をきき、その音を確かめてから、寝返りをうって、気持の昂ぶりを鎮めようとする。上手くいかない。コップにいっぱい水をのむ。足を水で冷やせば上手く眠れるといった話を聞いたことがあるが本当だろうか。しかし、起きあがって、風呂場まで行く気力がない。別の方法を思いだした。羊を、1匹、2匹、3匹と数える方法だ。数えきれなくなったとき、身体が重くなって、闇の底に沈み、意識も消えているはずだ。2時間、羊を数えてみたが、眠りは来ない。失敗だ。雨音が耳について離れなくなった。頭の芯は醒めたままだ。眠りが結晶しない。底へ落ちると思った瞬間、風に突きあげられるように浮上して、意識が泡立ってしまう。夜の底が白くなってきた。

X氏は宙吊りになったままだ。朝は、まだ足もとにはない。起ちあがって、窓を開け放った。雨が降っている。遠い家並みの彼方も白く煙っている。闇も光も力をうしなって、ぼんやりとした境

界や領域が定かでない時空を宙吊りにする。午後3時の、ものごとをはじめるには遅すぎ、切りあげるには早すぎるあの時間の宙ぶらりんとはまったく別のものだ。夜でもない、昼でもない、もちろん朝でもない、奇妙な時空だ。夜と昼の彼方とでも呼べばいいのだろうか。夜や昼を超えたところという意味ではない。彼方がそのまま此方であるような領域とでも言えばいいのだろうか。中心と辺境がぴったりと重なって、しかも矛盾しないという奇妙な時空だ。X氏は、30年も地球の空気を吸っているのに、夜と昼との彼方に流れているこの時空を、ゆっくりと見たことがないと思った。偶然がくれたプレゼントだ。宇宙のヘソの緒に触れているような、宇宙の中心と果てに同時に放り出されたような、妙な気分だ。X氏は放心して窓の外を眺めた。

不意に、中空に、繃帯をした左手が浮かんだ。幻影だと思った。白い繃帯は、ゆっくりと結び目が解かれて、ひらひらと風に揺れ、長い尾をひいた。俺の手だ。歯跡が見える。自分で自分の左手を見ている。しかも、手は中空にある。風が生温かくて、何かの感触に似ていると思った瞬間に、真紅の唇が出現して、繃帯のとれた左手にぴったりと吸いついた。時間にして、10秒か12秒のことだった。左手も唇も消えてしまった。白い雨の糸が無数の線をひき、垂直に降下している。X氏は、床に着き、朝を待った。

雨が降りはじめて、97日目の朝だ。あらゆるものが腐りはじめた。カビの力が強くなったのだろう。冷い夏だった。大量の野菜が腐り、都市のマンホールではおびただしい数の水死したネズミの